

埋橋孝文＋
同志社大学社会福祉教育・研究支援センター編
『貧困と生活困窮者支援
ーソーシャルワークの新展開』
(法律文化社、2018年)



評者 廣野 俊輔（大分大学福祉健康科学部専任講師）

1. はじめに

本書評は、埋橋孝文 同志社大学社会福祉教育・研究支援センター編『貧困と生活困窮者支援ーソーシャルワークの新展開』（以下、本書）について、ソーシャルワークにいかなる課題を投げかけているのかに焦点を当てながら論評するものである。そして、この書評を通じて読者が本書に関心をもってくださることを目指している。

本題に入る前に3つ前置きをしておきたい。1つ目は本書の全体像の簡潔な説明である。本書の全体を思い切って要約すれば、貧困および生活困窮者支援に関する諸問題を第一線の研究者や実践者のセミナーでの報告をもとに、読みやすい形に編集したものといえよう。三部構成となっており「第Ⅰ部 問題解決しない支援」と題して抱僕の奥田知志の講演を収録し、「第Ⅱ部 生活困窮者自立支援における家計相談支援」では、家計相談の実践者（行岡報告、有田報告）およびソーシャルワークと家計相談の関係性についての研究報告（鶴浦報告）を収録している。「第Ⅲ部 子どもの貧困と学校／保育ソーシャルワーク」では学校ソーシャルワークおよび保育ソーシャルワークに関する2人の研究者（門田報告、石井報告）の報告が収録されている。

前置きの2つ目は本書の特長についてである。本書の特長は①実践者と研究者の双方がバランスよく執筆していること、②各章の最後にQ&Aを付していること、③各章の執筆者以外の研究者や実践者が「論点と争点」と題したコメントを各部の最後に付していることの3点である。これらの特長は読者が課題について多角的に理解することを助けてくれる。

前置きの3つ目は、本書評におけるソーシャルワークの理解である。ソーシャルワークとは何かということ自体が非常に論争的なテーマであって、詳しく論じることができない。そこで社会福祉士養成課程等で教育されているいわゆる教科書的なソーシャルワーク論を想定して議論を進めることを断っておく。

2. 本書がソーシャルワークに投げかける課題

評者の考えでは、本書がソーシャルワークに投げかけている課題は次の4つである。すなわち、①ソーシャルワークの開始と終結、②利用者をサービスにつなぐことの意味、③福祉課題の複合性と累積性、④支援における連携のあり方である。この順に沿って議論を展開する。

第1の論点はソーシャルワークの開始と終結についてである。従来のソーシャルワーク論は開始や終結について、他のプロセスほどは注意を払ってこなかったのではないかと。もう一步踏み込んでいえば、「困った人は相談に来て、支援を終了した後はどうにか自分でやっていく」ことが、曖昧なまま前提にされてきたのではなかったか。本書で提示される事例やさまざまなエピソードは、課題を抱えた人が必ずしも相談に来るとは限らないということを明確に示している。また、困ったらいつでも相談に行ける場所を必要としている人を想定すれば支援の終結を明確に定めることも困難である。

第2の論点はソーシャルワークにとって利用者をサービスにつなぐことの意味である。こうした表現は一般的によく用いられ、ソーシャルワークと言えば利用者をサービスにつなぐ活動であると理解している人も多いだろう。しかし、本書はつなぐということがそれほど単純ではないことを私たちに示唆している。すなわち、①必要なサービスが存在しなければつなぐことはできない（この場合、サービスの開発そのものがソーシャルワーカーの役割となる）、②そもそも自分が「サービスが必要な状況である」ということを認識することが難しい（この点の背景は見逃されてきた障害や幼いころから貧困状態であるなどさまざまな要因）、③サービスにつながるための諸手続きが非常に負担になる場合がある、④つながったサービスをうまく活用できるとは限らない、⑤支援終了後もその生活を維持する力が必要といった諸課題である。

また、利用者をサービスにつなぐことだけをソーシャルワークだとせまく理解してしまうと、対応するサービスがなければ、ソーシャルワークの対象ではないと考えてしまうことにつながっていく。特定の解決すべき課題がある場合に、それを実現する金銭給付やサービス給付は極めて重要だが（それがなければクライアントの訴えを聞くだけで何もできない）、他方で奥田氏が指摘しているように「相談することができる人がいる」こと自体の意味も重要である。

この奥田氏の指摘は非常に興味深く、ソーシャルワークと相談の関係に関する論点とも言い換えることができる。この指摘を敷衍して評者なりにソーシャルワークとサービスの関係を整理しておきたい。サービスがあってもソーシャルワークがなければ、多くの人は自分の使うべきサービスをマネジメントしにくい（逆に言えば、入所施設しかサービスがない状況だとソーシャルワークや相談業務の意義は薄い）。ソーシャルワークあってもサービスがなければ、すでに述べたように困りごとの解決は難しい。ただし、奥田氏の指摘する通り相談できることそのものの意味もある。サービスとソーシャルワークの関係は以上のようになっているのではないか。

第3の論点は問題の複合性や累積性である。戦後の日本の社会福祉制度はおおむね対象者別に発展してきたと言ってよい。そうした状況の中でソーシャルワークもまた事実上対象者別もしくは所属機関別に分化する傾向があった。ところが、本書で行岡氏や門田氏の提示している事例を見れば明らかなように、貧困や生活困窮に陥っている家庭は、それぞれが複合的かつ累積な課題を抱えており、その上、それらが相互にしばしば悪影響を与えているといった状況にある。かかる状況に対応するには所属機関別、対象者別のソーシャルワークでは限界があると言わざるを得ないだろう。この点は本書が投げかける重要な課題である。

この論点に関連してソーシャルワークと様々なサー

ビスの制度化にも少し注目しておきたい。先ほどから指摘しているように、ソーシャルワークにとって利用できる社会資源は重要なものだが、それらが制度化されるとその枠内でできる支援を行う傾向も生まれてくる。そうした場合には当事者本位の支援計画ではなく、サービスの側に当事者を当てはめるような支援になりかねない。

第4の論点は支援者の連携のあり方に関する論点である。一般的には各々の専門職が固有の知識やスキルを出し合って、それぞれの守備範囲を担うのが連携と考えがちである。しかし、行岡氏や有田氏の家計相談に関する報告がよく示しているように、仮に家計の相談を担うとしても、問題の全体像をよく踏まえなければ支援は効果的にならない。連携し合っている個々の専門職が利用者の生活課題の全体像を共有している必要があるのだ。本書は貧困・生活困窮者の支援を事例として連携もまた一筋縄ではいかないことを示している。

3. おわりに

最初に断っておくべきだったかもしれないが、評者の専門は障害者福祉である。ソーシャルワークについても生活困窮者支援についても、畑違いとまでは言わないが、まだまだ研究途上というべき立場である。このテーマに関心をもったきっかけとして、所属先の大学に赴任してから同僚の教員に誘われて何度か生活困窮者支援の調査に参加し、見逃された障害をもつ人の多さに驚いたことがある。また、相談当初に中心的な課題と思われていたことと全く異なる課題が実は問題の中核であったといったケースも多く、どんな分野にも関係するのだと実感させられた。ソーシャルワークだけでなく、社会福祉の研究もまた分野別・対象者別に展開されてきたが、生活困窮者支援の研究はそのあり方にも一石を投じているように思う。その意味で研究や実践の分野に囚われず多くの人に手に取っていただきたい一冊である。